

新聞記事抜粋

読売新聞 2017年1月10日 (朝刊)

乗斥

辰時

(より撮影要物原可)

金色夜叉 能舞台に

熱海在住 静大名譽教授が構想

「伊豆の踊子」も制作へ

熱海市に住む静岡大名譽教授の宗片(上田)邦義さん(82)が、尾崎紅葉の「金色夜叉」を基に、能の脚本を制作する構想を描いている。紅葉は慶応3年12月16日(1868年1月10日)生まれで、2018年は生誕150年にあたる。宗片さんの作品が公演に結びつくのは、祝いの年に花を添えることになりそうだ。

宗片さんは、シェークスピアが専門の英文学者。現在は、世界の文化の調和を目指す研究者らの組織「国際融合文化学会」の会長を務める。静岡大や日大の教壇に立ちながら、シェークスピアの原作から能を生み出した。

四大悲劇と呼ばれる「ハムレット」「オセロ」「マクベス」「リア王」から能を制作。自ら英語でシテ(主役)を演じたほか、プロの能楽師が演じられるよう日本語の能の脚本を制作した。

こうした功績から15年には、瑞宝中級章を受章。これを記念して、宗片さんの新作能「ロミオとジュリエット」が国立能楽堂(東京・千駄ヶ谷)で初演された。10年ほど前から熱海市で嘗らず宗片さんは、周囲から地元に関わる作品を能にするよう勧められた。これを機に「金色夜叉」や川端康成の「伊豆の踊子」の制作を思い立ったという。

金色夜叉は、紅葉が1897年(明治30年)から5年余りにわたって読売新聞に連載し、熱海の名が全国に知れわたるきっかけとなった。しかし、小説は未完のまま紅葉は他界した。主人公2人の別れの場面を基にした眞一お高の像(熱海市東海岸町)は観光名所の一つだが、男性が女性を離る像をめぐっては様々な議論もある。このため、宗片さんは「女性蔑視」ともいわれるイメージを一新するよふな能を書きたい」と考えている。

「今日今夜になったならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから」と眞一が語る熱海海岸の名場面を取り上げる。後半で「紅葉が最後まで書いていたら、こうなるのではないかと納得してもらえる作品にした」と話している。

一方、「伊豆の踊子」の能については、伊豆市での公演を目指して、同市関係者と協議を始めたという。



●金色夜叉の制作について構想を語る宗片さん(熱海市)。国立能楽堂で初演された新作能「ロミオとジュリエット」(2015年12月8日、三浦研さん撮影)

